

Ⅲ テーマ 「国際理解」の実際

1. 比較によって自文化を知り、国際理解の基盤を作る

—「日本・日本人を考える」を通して—

寺 本 学

1. 講座の基盤

(1) 講座設定の理由

日本は歴史上からも地理的条件からも他国・他民族との接触が乏しく、囲いの中で生きてきた民族といえるであろう。そんな日本人が、現代の環境変化の中でどう生きていけば良いのだろうか。

風習や習慣はもちろん、価値観の異なる他民族との接触が日常化してきているのである。

私は、3年間のポーランドでの生活の中で、「多くの日本人たちがポーランドの現地社会と全く異なる狭い日本人社会を造り、その中で生きていること。その子供たちもまた、大人と同じような擬似日本生活をしていること。」を実際に体験した。

日本人は、外国に暮らしていても心は常に日本に向き、日本を基準にして物事を考えがちなのである。

自分自身を振り返ってみても、なかなかポーランドという国の良いところを見つけられなかったような気がする。一年がすぎ、二年目に入って、ポーランドの人とのつき合いが広がり、家庭に招待され始めてからイメージが変わったことが多いのであるから、仕方がないことかもしれない。

私はまぎれもなく日本人である。しかし、こういう3年間の海外生活を通して、私の中に日本や日本人というものについて実は何も知らないのではないかという疑問がわいてきた。日本とは果たしてどんな国なのか、日本人とはいったいどういう民族なのか、日本文化とは……。

私の中に起こった疑問は、これからいやおうなしに国際社会の中で暮らしていかなければならない中学生たちには避けて通れない問題でもある。

国際理解といえば、すぐに外国語の習得、外国事情を知る、異文化の人と出会うこと、外国との交流をすることなどが考えられるが、もっと身近なところでの国際理解の基盤作りを見落としているのではないかと考えさせられたのである。

日本人が国際社会で自信を持って活躍し信頼されるためには、まず、日本人自身が日本社会や日本文

化を認識しようと努力していくことが必要となる。それと共に多様な異文化の個性を認め、受け入れていくことのできる人間として成長していくことが必要である。外国へ出れば、私たちはまぎれもない日本人なのであり、まず、自分自身の国や民族の特徴や生き方を理解していく心を育てなければならない。

国際理解の基盤は、相手を受け入れ、認めていくことであると私は考える。そのためには自分自身をしっかりと確立しておくことが必要になる。

以上のような考えに立ち、この学習では、まず、自国である「日本」や「日本人」という自分自身が背負っている特色や文化を理解し、認識していく力をつけることを目指そうとした。

そして、その方法として、外国との比較によって自文化を理解していくことにし、このような学習が積み重なることによって、国際理解の基盤づくりができていくのではないかと考えたのである。

国語科との関連について考えてみよう。

田近洵一氏は国語教育の中での国際理解教育の歴史・現状・課題として、次の三点をあげている。

① 日本人の問題として（傍線、筆者）

「日本人の問題としていうなら、言葉の問題もあって、他民族の生活・文化あるいは民族感情への無理解や、日本文化中心主義の価値意識が、外国人との関係をゆがめ、民族協調をスポイルしているといった現実がある。……」

「私たちは、(中略)、日本の文化や価値意識を国際的にどう明確化していくか、その前に、一人一人が日本人としての文化的なアイデンティティーをどう確立していくかを考えなければならない。」

② 教育における国際化について

「また、国際理解教育は、外国の文化や外国人の価値意識への視野を広げ、受容の能力を育てることではあっても、自国文化に関する素養が貧困なまま、外国に自分の夢を託すような、単なる「外国理解教育」でもない。」

「すなわち、国際化時代の教育は、異文化理解の

教育であり、日本人としての文化主体形成の教育である。そしてそれは、自己と他者との出会い（他者理解）を通して、自己を形成し、さらに、異質性を前提としつつも、相互の人間的な関係を広げていく—そのような能力を育てるという点で、国語教育の本質的なあり方につながるものだといえよう。」

③ 新しい時代の国語教育

「新しい時代の国語教育は、日本語・日本文化への確かな理解を養いつつ、異文化への受容の幅を広げ、価値観の多元化する中で、言語によって自己を表現し、対話（共同思考）の場を形成する言語能力を養うものでなければならないのである。

国際化時代の教育、あるいは国際理解教育は、外国理解教育ではない。（中略）その本質は、多元的文化の相互理解の教育であり、その柱は次の三つである。

(ア) 自己のアイデンティティーの確立としての母国語教育（日本語・日本文化の教育）

(イ) 自分とは違う異質な他者を受け入れ、自己をとらえ直す他者理解の教育。

(ウ) 価値観の違うものとの間に共通理解を生み出すコミュニケーション能力の教育

以上の観点に立つ時、国際理解教育は初めて国語教育を本格的に見直す観点となり得るのである。」

この観点にたって95年に行った3年生対象の国語授業の中で生徒たちは次のように述べている。

「初めて、日本の姿、日本人の姿を学習するということを聞いた時、私たちは日本人なのだから日本のことを知っているに決まっていると思いました。けれど、その後で先生が「外国の人に、日本はどんな国ですか？と聞かれたらどう答えますか。」といわれて、私はどんなに頭を働かせても、日本を紹介する言葉が見つかりませんでした。そして、それを悔しく思い、私は日本人・日本を知る必要があると強く思いました。（3組I子）」

「私はこの学習に入るまでは日本文化が最も良い文化だと思っていた。海外で日本人が傍若無人な振る舞いをするのも別に関係ないやと思っていた。が、しかし、資料を集めていくうちにその考えはあっさりくつがえされた。「文化は良い悪いというものではなく、両価値を同時に含むもの」という文を読んで、そうか、日本文化にも悪いところはあるし、他国の文化の中にも、その国の歴史、良いところが日本のそれに負けず劣らずあることに気づけた。とても収穫があった。（4組U男）」

「多くの日本人がそうであるように自分の国を全て基準にして外国や物事に接してきました。でも外国の様々な文化に「日本」という色眼鏡をはずして目を向け、そこから逆に見る「日本」はまた別のもの

のなんだということが分かり、何か国語に対する考え方が変わりました。この学習を通して、自分の国のことは「灯台もと暗し」であり、「自分の国の文化を知る」ことは「異文化を知る」ことから始まるということを実感しました。（H子）」

これらの感想の中には、生徒の心の中に潜む「日本人としての問題」が率直に表現されている。同世代のかかわりの深い生徒が考え、追求してまとめた小研究「私の日本・日本人の姿」という160人のレポートを土台にして、国語の「読む・聞く・話す・書く」という言語活動の力を育てることに目標を置くのではなく、認識の変化に重点を置いて総合学習として学習を展開してみようと考えたのである。

(2) 学習活動の工夫

単に外国を理解しようというのではなく、「日本・日本人を考える」というテーマのもとで、生徒たちはおもいおもいの視点で日本や日本人を見つめ直しながら国際理解を考えていくことになる。

今回実際に生徒たちが選んだのは、「食器」「食べ物」「食事の習慣」「宗教と人間」「外国人から見た日本人の姿」という視点であった。この視点に従って、数人のグループで協力しながら自分たちの興味に従って資料を探し、そこに現れてくる「日本・日本人の姿」を考えていくのである。

直接体験ではなく、間接的な体験であるが、それぞれがいつでもどこでもたくさんの人と出会える間接体験を選んだことで、生徒たちは、日常生活の中では出会うことのないたくさんの人や思いに触れ、自分の今までの体験や考えと重ね合わせながら、「日本・日本人」、つまり、自分自身の生き方を見つめ直していくに違いないと考えた。

2. 目 標

① 国際理解のためには、相手を受け入れ、認めていくことが基盤となる。そのためには、自己をしっかり確立しておかなければならない。まず、自国である日本・日本人という自分自身が持っている特色や文化を理解することが、他国や他を認め尊重していくことになる。（最終達成概念）

② 昨年度の3年生の小研究「日本・日本人の姿」のレポートを土台にして、友達や同年代の生徒のもの見方、考え方を知る。（自文化理解）

③ 自分たちで日常生活を見つめ直し、さまざまな情報を集めていくことによって、新たな面での日本や日本人の特色に気づく。（自文化理解・異文化理解）

④ 自分のまとめたレポートをもとに、お互いの発表を聞き合い、より広い視野から国際理解を捉え、

自分の見方や考え方を広げる。(人間教育)

3. 総合学習計画と学習の重点

- ① 個々の興味・関心を大切に、自分たちで課題を発見し、追求していく態度を育てる。
- ② 図書館や新聞からの情報を大いに利用し、自分たちの力で資料や情報を収集し、それを目的にそって処理していく力を育てる。
- ③ 日本や日本人に対する興味・関心を育て、外国との比較により自文化を理解し、国際理解への視野を広げる。

時	活動計画	追求・留意事項
3	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;"> 去年の3年生の「日本・日本人の姿」を読む。 </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・同世代の中学生(去年の160人の3年生)が考えた「日本・日本人の姿」から、異文化や国際理解についての考え方や見方を知る
1	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;"> テーマを決定する </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・日常生活の中から中心にどんな視点で情報に接し、集めていくかを考える。
夏休み	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;"> 自分のテーマに従って情報を収集する </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・本や新聞を自分の視点で見つめながら生活する。
3	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;"> 情報整理・情報交換 </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・グループ内で持ち寄った情報を処理しながら、情報量を考える。
4	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;"> 再情報収集 </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・学校、市内の図書館や教師からの情報を加え、情報を見つめ直す
3	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;"> まとめ(レポート作り) </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・自分たちのグループの考えを講座内で紹介していくために、情報をまとめ、発表準備をする。
2	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;"> 講座内発表会 </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・発表を聞くことによって、自分たちの視点と重ね合わせたり、比較しながら聞く。
2	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;"> 全体発表会 </div>	

4. 総合学習の実際

前半の学習では、いかにして生徒の心を耕していくかが問題となる。ここで、興味や関心がわかなくては自分自身で視点を考えて追求していくことが困難になるからである。

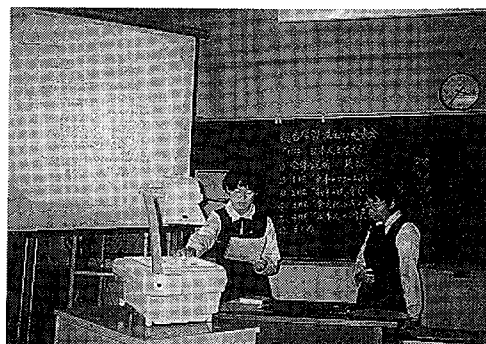
そこで、今回学習への興味づけとして選んだのが「私自身の体験をスピーチにしたもの」と「昨年度の3年生160名の小研究」であった。この二つによって、これから自分たちが考え、追求していくことが

どうなっていくのかを目安としていったのである。

追求の視点が決まれば、問題意識は少しずつ心の中に芽生えてくる。学習のための材料も自然に目につくようになる。教師はその学習材料をもう少し広い視点で補充していくのである。例えば、読売新聞「リレー航空便」『アメリカ人の日本人観』宮本美智子・永沢まこと、草思社『中国人と日本人』邱永漢、PHP文庫『妻たちの海外駐在』などである。

後半の学習では、生徒たちは、学校・県立・私立の図書館へ積極的に出かけていき情報を処理し、まとめていった。その成果を講座内で発表したのが次の写真である。

講座内で発表した写真



小さな発表会ではあったが、お互いが出会ってきた学習材料をどう心に受け止めたかを、みんなに紹介することによって、あいまいだった自分自身の認識を深めていくことができたのではないと思う。

5. 学習の成果と課題

〈生徒のイメージマップにみることばの変化〉

学習前のイメージ	学習後のイメージ
<ul style="list-style-type: none"> ・外国・ホームステイ ・外国人・言語・交流 ・異文化・英語・留学 ・海外旅行 	<ul style="list-style-type: none"> ・外国・ホームステイ ・外国人・言語・交流 ・伝統・文化・中国 ・文通・総合学習 ・日本・四字熟語 ・積極的・自文化理解 ・くにびきメッセ

直接体験に限られていた国際理解へのイメージを、まず、自分の周りのできることは何かという視点で見つめ直していこうとしている。身近な国際理解という視点が生徒の中に生まれつつあるのではないかと期待させてくれる。

以下に学習の重点と生徒の感想のかかわりを考えてみることにする。

- ① 個々の興味・関心を大切に、自分たちで課題を発見し、追求していく態度を育てる。

生徒たちは、普通の授業になくてこの学習にあったものとして「ゆっくり個人個人で活動ができるこ

と」「自分のやりたいことを自分のやりたい方法で調べることができること」「調べたいことをすぐ調べたいだけ調べられる」という個々のペースや興味関心が生かされたことと、「先生に教えてもらうのではなく、自分で資料を捜して、自分で最後までまとめていくこと」「自分で調べ、意見をはっきり持つこと」「問題点や疑問点を深く考えたりできる」という課題発見と追求の自由さに魅力を感じたようである。最後にまとめたレポートに次のような感想があった。

「普通の授業では先生の言葉を書き留め、意見を言うという感じだけど、総合学習は自分で調べて、自分でまとめて、先生の役目は生徒が困っているときに助言してくれるというような感じでした。だから、調べた内容もだけれど、それより「調べる方法やまとめ方」の勉強ができたと思います。内容についても、普通の授業より生活に密着したものだったので役に立つのではないのでしょうか。難しいけどやりがいがあるので総合学習は来年もやりたいと思います。(石原)」

総合学習の内容や進度の自由さについて感じているし、その反面自分に課せられる責任についても考えているのが嬉しいところである。

② 図書館や新聞からの情報を大いに利用し、自分たちの力で資料や情報を収集し、それを目的にそって処理していく力を育てる。

この学習中大変だと思ったことに、「多くの資料の中から厳選してまとめること」「図書館などにいった本を借りる時、借りるべき本を捜し出すこと」「いろいろな本を読んで、そこから日本人の姿を読み取ること」のように、自分が今必要としている情報をどのようにして見つけ出し、選び、まとめていくかという情報処理の力がかなり必要となってきたことがこの学習のひとつの魅力であったことがうかがえる。

③ 日本や日本人に対する興味・関心を育て、外国との比較により自文化を理解し、国際理解への視野を広げる。

私が嬉しかったこととして、

「国際理解は体験しないとできないものだと思っていたので、日本と外国の文化を比べて日本人を知ることによって見えてきたのはとても意外でした。」

「今まで国際理解というのは、外国だけを見つめるというような意味に取っていたような気がするけれど、自分の国の文化を見つめ、知り、理解していくことが国際理解の第一歩だと思う。」

のように、今までの認識をこの学習によって少しは広げることができたのではないかとと思われる感想が

出てきたことがある。

もちろんこれだけが国際理解教育ではないが、「私は今まで無意識に生きてきた。日本人としての15年間を改めて振り返るいい機会だったと思います。(中略)日本の文化だけでなく、他国の文化についても関心を持てるようになったと思います。(井上)」

「国際理解というと難しく考えるけれど、自分たちから見つめていけば自覚がもてる。」

というように、自分自身とはどういう存在なのか、自分を取り巻く当たり前と感じる文化について見つめ直すことによって、生徒の今後の生き方に少しは影響を与えることはできたのではないかと考えたい。

今後の生活には、「今回はそれぞれの国のイメージというものからも日本人や外国人を探ったけれど、個人の性格なんて国にはかかわらず豊かなものだと思う。「国際理解」と難しく考えるよりも、実際は国に関係なく個性を認め、友となっていけば、それが真の「国際理解」になるのではないかと。(都間)」という提言も生徒からあがってきた。

アンケートでは9割の生徒が、新しいものの見方に触れたと答えていた。しかし、今後への課題として、より効果的な学習にしていけるためには、これに、ゲストティーチャーが加われば、その印象や効果は更に上がったに違いないと私は考える。

今後、附属学校であることを有効に利用し、留学生も数年前よりはるかに増えている現状から考えても、さまざまな国の文化を持つ人々との直接体験も加えながら学習の展開を広げていくことを可能にしたいと考えている。

「今回の総合学習のテーマは「日本・日本人を考える」つまり、国際理解をするためには日本・日本人とは何なのかをはっきり分かっていなければならないのでは、と考えたからだ。我々は今回の学習を通じて、自分自身もその答の一端をつかめたように感じる。我々はこれからの国際社会の一役を担っていかなければならない。その点ではこの学習は大いに役立ったと思う。(堤)」

という生徒の自覚をより深い実感としてもたせていけるよう学習を今後も目指していきたい。

〈参考文献〉

倉澤栄吉編(1994)『国際理解教育と教育実践—国語科における国際理解教育—』エムティ出版。

北尾倫彦・金子守編(1994)『中学国語観点別学習状況の評価基準表—単元の評価目標と判定基準—』図書文化社。

(てらもと まなぶ・国語科)